

## 第9の縁(2) 松井立身先生と石川唯一先生

ではなぜ予は、こうして教師への途を一筋に思いつめたかという、「神天」は予が小学校の幼童であった時に、卓れた師松井立身先生を授かったためである。先生は旧刈谷藩の士族であって、少年の頃藩主のご子息の「学友」であった方であって、上品で清爽なお人柄は、子供心にもいかにもさもあらんと思われたほどである。ところでその松井自身先生について、予の終生忘れがたい思い出は、修身の時間に楠公父子の「櫻井の駅」の訣れの話となると、先生は元来白哲の方であったが、万顔次第に淡紅色を帯び、やがて二筋の涙が頬に光るものがあった。子ども心にもよくのその心情が理解出来た気がした。先生はやがて純白のハンカチを取り出され、1年坊主の幼童を前にして、やや照れくさいとでも思われてか苦笑いされながら、「これでも昔は二本差した者であって、他人事とは思われないので……」と仰言った。この時の感動は、爾来八十余年になる今日といえども、毫も薄らぐ事はなく、我こそは<sup>げ</sup>実に「日本一の大先生に教わりてこそ」との感を禁じ得なかった。

石川唯一先生……小学校時代第二の師縁。先の松井立身先生は27年も勤められたが代用教員であったがため一文も年金がつかないで、経済的には晩年お困りであったようであるが、その石川唯一先生も資格は尋常小学校選科教員であったが、漢学の素養はかなりお有りのようで、夏休みに早稲田大学の学生に卒論の指導として「文選」を教えられたようである。「文選」は中国の古典の中でも特に難解であるとのことであるが、身は一小学校教師でありながら、それを教えられたこの石川先生に、小学校時代に教わったことが、ひとり予の東洋学への種まきとなったのみならず、長じて後も在野篤学の士に対する尊敬の念を抱く素因となったと思う。

けだし予の東洋的なるものの最初の種まきは、この石川唯一先生により、小学5年生だった時、管公の「月耀晴雪の如く、梅花照星に似たり」の一詩を暗唱させられたことに始まるといって良い。